Osaka University Knowledge Archive

Title	マルロー『人間の条件』における「身体」イメージの混在
Author(s)	上江洲, 律子
Citation	Gallia. 2015, 54, p. 103-112
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/61968
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

マルロー『人間の条件』における「身体」イメージの混在

上江洲　律子

はじめに

生涯に渡り、「死に対峙する[1)]」人間の在り方を問い続けたマルローは、1933年に発表した小説『人間の条件[2)]』において、「死は受け身だが、自死は行為である」（*CH*, VI, p.734）という考えに基づき、青酸カリを用いて「自死」（作品中のフランス語では «se tuer»）を遂行する人物を描いた。主要登場人物の一人キヨシ（以下、略称「キヨ」を使用）である。名前から窺えるように、彼はフランス人の父と日本人の母の下に生まれ、8歳から17歳まで日本で育った人物として描かれている（*CH*, I, p.556）。ちなみに、この小説は、1927年4月の中国の上海を主な舞台に、当時、蒋介石が率いる国民党の一派がクーデターを起こし、それまで同党と共闘を展開してきた共産党員と労働者の粛清を行った史実を枠組みとする群像劇である。小説において、共産党員として描かれるキヨは、そのクーデターの渦中、かつて学校の雨天体操場だった広い部屋へと強制的に収容される（*CH*, VI, p.729）。そして、傍らの同胞が一人また一人、いわば死を前提とした拷問へ連行されていくのを目の当たりにしながら、先程紹介した「自死」を選択するのである（*CH*, VI, pp.729-736）。

マルロー自身も示唆しているように[3)]、この場面は、パスカルの『パンセ』の一節「多くの人間が鎖につながれていることを想像しなさい。皆、死を宣告されている。そのうちの何人かは、毎日他の人たちの面前でのどを切られ、残っている人たちは、自分に似た人たちの条件の中に、自分自身の条件を見る。そして、苦しみと絶望のなか互いに向き合いながら自分の番がくるのを待っている[4)]」を彷彿

1）André Malraux, *Antimémoires*, *Le Miroir des limbes*, in *Œuvres complètes*, t. 3, Éditions Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1996, p.359 : «Le livre et le personnage sont nés d'une méditation sur ce que l'homme peut contre la mort.» 竹本忠雄訳『反回想録（下）』新潮社、1977年、525頁。

2）André Malraux, *La Condition humaine*（abrégé, *CH*), in *Œuvres complètes*, t. 1, Éditions Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1989（1ère éd., Éditions Gallimard, 1933). 各引用後の括弧内に、出典の省略記号と章番号、頁数を示す。また、和訳および引用の下線は論者による。なお、和訳は以下を参照に論者が訳出した。小松清・新庄嘉章訳『人間の条件』『新潮世界文学45 マルロー』新潮社、1970年。

3）Gaëtan Picon, *Malraux par lui-même*, Éditions du Seuil, coll «Écrivains de toujours», 1953, p.2 : «Le cadre n'est naturellement pas fondamental. L'essentiel est évidemment ce que vous appelez l'élément pascalien.»

4）Blaise Pascal, *Pensées*, Éditions Gallimard, coll. «Folio classique», 1977, pp.267-268 : «Qu'on s'imagine un nombre d'hommes dans les chaînes, et tous condamnés à la mort, dont les uns étant chaque jour égorgés à la vue des autres, ceux qui restent voient leur propre condition dans celle de leurs semblables, et, se regardant l'un l'autre avec douleur et sans espérance, attendent à leur tour.» なお、和訳は次の既訳を参照とした拙訳である。前田陽一・由木康訳

させる。後に、「人間の条件のイメージ[5)]」として評されるこの一節において、人間は逃げることも叶わず常に死を目前に生きる存在として見なされていると言えるだろう。そして、そのイメージを具現化したと言うべき『人間の条件』の収容施設の場面で、死について考察し続けてきたとされる人物（*CH*, VI, p.734）、言い換えると、キヨが取る行動は、まさしく「死に対峙する」人間の在り方を表象するものだとして考えることができる。つまり、『人間の条件』では「自死」が一つの答えとして提示されているのである。

しかし、『人間の条件』の刊行から2年後、1935年に発表された小説『侮蔑の時代[6)]』では、「自死」をめぐって異なった結論が導き出されることになる[7)]。その点について確認したい。ここで新たに取り上げる『侮蔑の時代』は、出版時とほぼ同時代を背景として描かれた作品で、アドルフ・ヒトラーの政権下におけるドイツの強制収容所を主な舞台の一つとする。主人公となるドイツ人のカスナーは、『人間の条件』のキヨと同様、共産党員として設定されており、同じく連行された強制収容所の中で「自死」を図る。ここまでのプロットを考慮すれば、同作品は先行する『人間の条件』と重なるものだと言えるだろう。しかしながら、結局、『侮蔑の時代』において、「自死」は未遂に終わることになる。具体的に言えば、カスナーは、「安らかに死ぬこと」を成就させるべく、自分の手首に爪を突き立てるが、「肉体は彼が思っている以上に弾力性があり、しかも堅かった」という描写が示すように、その試みは失敗に終わることになるのである[8)]。『人間の条件』と『侮蔑の時代』を比較すると、それぞれの主人公の陥っている状況が酷似しているだけに、そこで彼らがとる行動の結果の違いが鮮やかな対比をなしていると言えよう。そして、前述のカスナーの描写から分かるように、『侮蔑の時代』で『人間の条件』と異なる結果を生じさせる要素が「身体」となるのである。

ところで、「身体」とは、マルローが手掛けた小説群を通して、繰り返し登場するモチーフである。最初に、異国を旅するフランス人と中国人の青年による往復書簡の形式を通して、「西洋」と「東洋」の対比を描いた小説『西欧の誘惑[9)]』（1926年）を取り上げてみよう。同作品では、当時、「西洋」と「東洋」の関係論を牽引したポール・ヴァレリーの言葉を反映するように[10)]、「西洋」の人間を支配するものとして「精神」が掲げられる[11)]。そして、その一方、「身体」が抑圧され

『パンセ』中央公論新社、中公文庫、1973年、144頁。

5）Blaise Pascal, *Pensées*, *op.cit.*, p.607 : « Une autre main, où Jean Mesnard a reconnu l'écriture d'Étienne Périer, a ajouté sur la Première Copie : « C'est l'image de la condition des hommes. »

6）André Malraux, *Le Temps du mépris*, in *Œuvres complètes*, t. 1, *op.cit.*（1ère éd., Éditions Gallimard, 1935）. 小松清訳『侮蔑の時代』新潮社、新潮文庫、1950年。

7）以下、『侮蔑の時代』の分析に関しては次の拙稿を参照。「マルロー『侮蔑の時代』における身体の表象」『沖縄国際大学外国語研究』第17巻第2号、2014年、1-14頁。

8）*Op.cit.*, p.803.

9）André Malraux, *La Tentation de l'Occident*, in *Œuvres complètes*, t. 1, *op.cit.*（1ère éd., Éditions Bernard Grasset, 1926）. 村松剛訳『西欧の誘惑』『世界文学全集77 サン＝テグジュペリ／マルロオ』講談社、1977年。

10）Paul Valéry, « La Crise de l'esprit », in *Œuvres*, t. 1, Éditions Gallimard, coll. « Bibliothèque de la Pléiade », 1957.

11）以下、『西欧の誘惑』の分析に関しては次の拙稿を参照。「マルロー『西欧の誘惑』における

たものとして提示される。いわば「精神」と「身体」の二項対立的な関係が示唆されるのである。しかしながら、ヴァレリーの論文においても「広大な身体」として比喩された「東洋」において[12]、「身体」は、主人公が自らを取り巻く世界を受容する感覚器としての機能を果たすことになる。そこに、単に抑圧されるに留まらない、「身体」の復権の兆しを指摘することができる。実際、その後発表された、同じく「東洋」を舞台とする小説『王道[13]』（1930 年）では、主人公たちが、死を筆頭とする不条理な状況に直面する際、「精神」が機能を停止して後退し、その代わりに、「身体」が前景へと躍り出る[14]。「身体」は「精神」の軛を逃れて復権を果たすのである。それは、「東洋」という場を通して獲得された、「西洋」にとっての「新しい人間の概念[15]」として見なすことができよう。そして、1935 年刊行の『侮蔑の時代』は、舞台を「東洋」から「西洋」へと移行させながらも、『西欧の誘惑』から『王道』へと焦点化されていく「身体」の復権という主題を継承するものとなる。なぜなら、強制収容所という、まさに「身体」が不条理な暴力に晒される場において、死を志向する「精神」に逆らい、生命を維持し続ける強靭な「身体」が描かれるからである。「身体」は「精神」と比肩する役割を担うに至ると言っても過言ではないだろう。以上のように、「身体」に着目し、マルローの小説を時系列的に概観すると、前述の『人間の条件』におけるキヨの死が異質なものとして浮かび上がってくることが分かる。そこで、本稿では、『人間の条件』を「身体」という観点から読み解くことを通して、マルローの小説群における「身体」の表象について改めて考察を試みたい。

1. 虐げられる「身体」

1）自死するキヨの「精神」と「身体」の関係

最初に、自死を選択するキヨについて考えてみよう。彼の出自は既に述べたようにフランスと日本である。また、外観に関しては、ランプの灯によって生じた影の効果で「ほとんどヨーロッパ人の顔に見えた」（*CH*, I, p.517）と描写される一方、「とても日本人的な顔」（*CH*, I, p.544）を有する人物として設定されている。顔の描写に付与された「とても」«si» という副詞の用いられ方から窺えるように、キヨは、出自だけではなく、外観的にも日本のイメージが強調されていると言えるだろう。このような前提を踏まえて、キヨは次のように描かれるのである。

> 仰向けになり、両腕を胸の上に置き、キヨは目を閉じた。それはまさしく死んだ人間の姿勢だった。彼は、横たわって、身動きせず、目を閉じ、ほと

身体性の萌芽」『フランス文学論集』第 47 号、日本フランス語フランス文学会九州支部、2012 年、1-14・59 頁。

12）*Op.cit.*, p.995.

13）André Malraux, *La Voie royale*, in *Œuvres complètes*, t. 1, *op.cit.*（1ère éd., Éditions Bernard Grasset, 1930）. 滝田文彦訳『王道』『新潮世界文学 45 マルロー』、前掲書。

14）以下、『王道』の分析に関しては次の拙稿を参照。「マルロー『王道』における身体性」『待兼山論叢』第 39 号文学篇、大阪大学文学会、2005 年、77-92 頁。

15）André Malraux, «André Malraux et l'Orient», in *Œuvres complètes*, t. 1, *op.cit.* p.114.

んどの死体が死んで一日経つと施される静謐さによって和らいだ顔をした自分の姿を思い浮かべた。そこではまるで最も悲惨な人々の尊厳さえも表現されなければならないかのようだった。彼は多くの人が死ぬのを見てきており、日本の教育に助けられて、自分の寿命を全うすることや自分の人生に相応しい死に方をすることは美しいと常々考えていた。（*CH*, VI, p.734）

この描写から、キヨにとって死ぬことは、「美しい」«beau» こと、言い換えると、肯定的な価値を有するものとして見なされていることが分かる。さらに、その後展開されるキヨの思考において、自死が「一つの生の至高の表現」«la suprême expression d'une vie»（*CH*, VI, p.735）となる可能性が認識されていることも、そのことを裏付けている。そして、このような価値観を助成したものとして提示されているのが「日本の教育」«son éducation japonaise» となる。「切腹」«harakiri»（*CH*, IV, p.645）という武士道に関わる概念によって象徴される教育である。ちなみに、1975 年、マルローは、「死ぬ権利」という主題について語った際、「日本的自死」について、「これは絶対的に一つの価値であると称してさしつかえない」と述べ、「日本的自死」いわゆる「切腹」に関する肯定的な見解を示した[16]。確かに時代的な齟齬は否めないが、『人間の条件』で掲げられる「日本的な教育」を照射する言葉として見なすことができるだろう。また、上記の引用では、「日本の教育」に関連して「考えていた」«pensé» という「精神」の働きを示す単語が用いられている。このような単語の使用は、問題となる教育がキヨの「精神」的な側面に作用していることを喚起させるものだと言えるだろう。以上を考慮すると、キヨという人物は、出自や外観のみならず思考面に関しても、日本のイメージいわゆる「東洋」のイメージが刻まれていることが分かる。特に、ここでは、「日本の教育」、言い換えると、「東洋」のある考え方によって培われた「精神」の働きがキヨを自死へと導いていることに留意したい。実際、キヨの自死に関わる描写には、「完全に意識した状態で」«en pleine conscience»（*CH*, VI, p.734）という修飾表現が見られる。仮定的な表現ながら、彼の自死が「精神」の作用の下に実行されることを示すものとして指摘できるだろう。興味深いことに、その一方で、「身体」には、「打ち捨てられた」«abandonné»（*CH*, VI, p.735）という修飾語が付与されている。そこには、支配する「精神」と虐げられた「身体」の構図が示唆されていると言えよう。

2）テロ行為における陳の「精神」と「身体」

a）キヨと類似する陳の「精神」

『人間の条件』の主要登場人物の一人に、キヨと同じく自死を選択する人物として、中国人の共産党員である陳が登場する。彼については、「中国人というよりも

16）竹本忠雄『マルローとの対話―日本美の発見』人文書院、1996 年、296 頁。Cf. André Malraux, «La mort au Japon», in *André Malraux*, Éditions de l'Herne, «Cahiers de l'Herne», 1982, pp.390-393.

モンゴル人に近い」«plus mongols que chinois»（*CH*, I, p.516）という記述が見られ、キヨと同様、「東洋」的な風貌を有する人物として設定されていることが分かる。しかも、陳とキヨの類似はそれだけに留まらない。彼とキヨが並んで歩く場面において、「彼らの前には二つの似たような影が伸びていた。同じ背丈に、同じような襟のセーター」（*CH*, III, p.617）という描写が見られるのである。「似たような」«semblables»、「同じ」«même»、「同じ」«même» という修飾語の繰り返しは、両者の外観的な類似性を強調していると言えるだろう。また、次の引用に見られるように、外観だけではなく思考的にも陳とキヨの類似性は示される。

> 「キヨは正しい。われわれに最も欠けているのは、切腹という観点だ。しかし、自死する日本人は神になるという危険性があり、それは堕落の始まりである。否。人々の上に血を流さなければ―そして、そこに跡を残さなければならない。」（*CH*, IV, p.645）

これは仲間の共産党員に自分たちの使命について語る陳の言葉である。キヨの考え方の紹介とそれについての同意の表現から、自死に関する陳とキヨの考え方の一致は明白である。しかし同時に、自死をめぐる両者の考え方の差異も示されていることが分かる。具体的に言えば、キヨが受け身にならざるを得ない死というものを主体的なものとするために、いわば自らの尊厳のために自死を選択するのに対して[17]、陳は「人々の上に血を流し」、「そこに跡を残す」ために自死を選択するのである。言い換えると、キヨの自死が個人の問題であるとすれば、陳の自死は自己と他者との関係によって成立する組織の問題となる。実際、こうした自らの考え方を証明するように、陳は、彼ら共産党員にとって共通の敵と化した蒋介石を殺害する目的で、彼が乗車していると想定した自動車に向かい、爆弾を手に飛び込むのである（*CH*, IV, pp.682-684）。確かに、こうしたテロ行為における自死は、個人という次元を超越した組織レベルの問題だと言えるだろう。しかしながら、陳の自死はここで完結するわけではない。その行為の直後、陳は路上で意識を回復し、最終的に身に付けていたピストルの銃口を口に入れて自死を遂行することになる（*CH*, IV, p.684）。しかも、自死の直前、「この世界において、その（蒋介石の）死さえ、彼にとってはどうでもよいことだった」（*CH*, IV, p.684）という描写が見られるのである。テロ行為の後、陳がその本来の目的を見失い、組織としての観点から逸脱したところで自死を決行していることが窺える。ちなみに、陳は、テロ行為に関して、「人生の意義」«Le sens de la vie»（*CH*, IV, p.645）あるいは「自分自身の完全な所有」«La possession complète de soi-même»（*CH*, IV, p.646）であるとも述べている。陳にとって、テロ行為は、個人の人生に価値を付与するものであり、あるいは、自分自身を完全に把握する行為であると見なされているのである。これは、自死を「自分の寿命を全うすることや自分の人生に相応しい死に方をすること」（*CH*, VI, p.734）とするキヨの認識と類似したものだと

17）Jean Carduner, *La création romanesque chez Malraux*, Librairie A.-G. Nizet, 1968, p.35.

言える。第二次世界大戦後、フランス語の辞書で «kamikaze» と記載されることになる日本の軍隊の行為を先取りするような陳の行為もまた、キヨの自死と同様、個人の生き方の問題であり、思考という「精神」の作用を前提とする、いわば「一つの生の至高の表現」（*CH*, VI, p.735）と言うべきものとなるのである。では、「精神」に先導されたこのような行為を通して、陳の「身体」はどのように描かれているだろうか。

b）解体され虐待される陳の「身体」

爆弾を手に自動車に飛び込んだ陳は、「まばゆい球体の中に沈み込んでいた」（*CH*, IV, p.684）という爆発を暗示させる表現の後で、次のように描かれている。

> 全身が傷んだ。まさに局部に留まらない痛みだった。その結果、もはや彼は痛みそのものでしかなかった。誰かが近づいて来ていた。彼はピストルを取らなければならないことを思い出した。彼はズボンのポケットに手を入れようとした。もはやポケットがなかった。もはやズボンがなかった。もはや脚がなかった。肉体はズタズタに刻まれていたのである。（*CH*, IV, p.684）

この場面では、「ポケット」から「ズボン」、そして「脚」へと意識の対象を移行させながら、陳が「身体」の一部を失ったことを認識していく過程が提示されている。このような「身体」の喪失は、陳が引き起こした爆発の威力を物語るものである。しかし同時に、陳が「身体」を尊重することなく暴力の対象にしていることを、イメージを通して示すものだと言えるだろう。陳の「身体」は、自らが遂行したテロ行為によって、片脚をちぎりとられて、いわば解体されているのである。しかも、このような状態にも関わらず、陳の「身体」は、さらなる暴力にさらされることになる。それは、爆発の後、痛みに苦しむ陳に近づいた二人の警官によって実行される。具体的には、最初に近づいた「警官が力いっぱい彼の肋骨を蹴ってひっくり返した」（*CH*, IV, p.684）後、次に近づいた「もう一人の警官が、かかとで怒り狂ったように蹴り、彼の筋肉全てを痙攣させた」（*CH*, IV, p.684）のである。これら表現に見られる「力いっぱい」«De toute sa force» および「怒り狂ったように」«furieux» という修飾語から、警官たちの暴力が容赦なく振るわれていることが分かる。陳の「身体」は解体され、徹底的に虐待されていると言えるだろう。そして、その直後、陳はピストルによって自死を遂げることになる。言い換えれば、自分自身に致命的な暴力を行使することになる。このように死を志向する陳の行動には、自死に意義を付与する彼の考え方が反映されていると言えるだろう。つまり、支配する「精神」を窺うことができるのである。以上を考慮すると、テロ行為を実行する陳の描写に、キヨの場合と同じく、支配する「精神」と虐げられる「身体」という構図が浮かび上がってくることは明白である。

ところで、陳と「身体」の関係を考える場合、陳によるもう一つのテロ行為を取り上げる必要があるだろう。それが描かれるのは、『人間の条件』の冒頭である。

そこでは、陳による就寝中の人物の暗殺が展開する。その暗殺の対象となるのは、陳たち共産党員の活動に必要な武器の調達のための書類を所持している人物であり、後に「唐彦大」（*CH*, I, p.550）という名が紹介される。しかし、この場面で、その名は語られず、「人／男」«homme» あるいは「眠っている人」«dormeur» という単語が用いられている（*CH*, I, pp.511-516）。このような名の不在は、ここにおいて重要なことが、名によって示される暗殺の対象者の個別性ではなく、陳によって実行される暗殺という行為そのものであることを示唆するものとして見なすことができるだろう。さらに注目すべき点は、暗殺の対象者が「その足は眠っている動物のように生きていた」（*CH*, I, p.512）という比喩的な表現によって描写されているということである。言葉を換えれば、「足」«pied» という「身体」の部位によってメトニミックに示されていることだ。勿論、この描写は、暗殺の対象者が、天井から蚊帳を吊り下げたヨーロッパ式のベッドで就寝しているため、外部から視覚的に捉えられる部分がその部位に限定されることを前提としている（*CH*, I, pp.511-513）。しかし同時に、この場面の「語り」の視点が行為者である陳に焦点化されており、彼の視点を通して、暗殺の対象者は、名を明示されない「人／男」としてだけではなく、解体された「身体」の部位として提示されていることが分かる。しかも、陳が短刀で殺害を実行する際、その対象となる人物を指し示す単語として「身体」«corps» という単語が繰り返し用いられるのである（*CH*, I, p.513）。以上をまとめると、陳のテロ行為は、政治的な意図という「精神」的な作用を要因として実行されながらも、対象となる人物の「名」が明示されないことで殺害という側面が強調されている。そして、その際、殺害という暴力の対象として掲げられるものが「身体」となる。つまり、陳のもう一つのテロ行為においても、支配する「精神」と虐げられる「身体」という構図を指摘することができるのである。

2. 抵抗を示す「身体」

1）官能のイメージ

キヨと陳の自死の場面には、もう一つ共通した特徴を指摘することができる。それは官能のイメージである。まず、青酸カリで自死を図る直前のキヨの描写を確認してみよう。収容施設で横たわるキヨが、自分の妻メイについて考える場面で、彼の思考は「現実を逃れて、初めて結ばれた時に身体から生じた愛情を、湧き上がる記憶として、執拗に思い出していた」（*CH*, VI, p.734）と表現されている。性行為が「愛情」«la tendresse» という快い感情を伴った記憶として提示されていることが分かる。そして、そこでは、キヨとメイの二人を指示する単語として「身体」«corps» が用いられているのである。これは、性行為が「身体」を主体とした行為であることを示していると言えるだろう。また、その記憶は「精神」の支配を逃れ、まるで自然現象のごとく「湧き上がる」«jaillissait» ように登場するだけではなく、「執拗に」«lancinante» 繰り返されていると述べられている。このような思考の在り方から、自死という致命的な暴力を目前に、キヨの「身体」の機

能が高まっていると見なすことができるだろう。そして、そこには官能のイメージが結びついているのである。次に、陳に関しては、テロ行為を実行するまさに直前、「彼は恍惚としたある喜びを感じながらそれ（将軍の自動車）に向かって走った」（*CH*, IV, p.684）として描かれている。この引用の中で、陳の状態を表現するために用いられている「恍惚としたある喜び」«une joie d'extatiqque» という語句は、快感が最高潮に達した性行為を彷彿させるものだと言っても過言ではない。陳の自死の行為にも官能のイメージが刻み込まれているのである。

ところで、『人間の条件』では、死と性行為との相関関係についての直接的な言及が見られる。具体的には、キヨの妻であるメイの言葉である。彼女は、ドイツ人の医者で、キヨの仲間でもあり、上海の秘密病院の責任者として働く人物として設定されている（*CH*, I, pp.541-542）。そして、日々、死んでいく人々に寄り添う中、死を目前にした者と性的関係を結ぶことになる。そのことをキヨに告白する際、次のような言葉が語られるのである。

> […] 欲望があるのよ。特に、あまりにも死の側にいると（私が慣れているのは他の人たちの死だけどね、キヨ）。でも、それは愛とは全く関係のないものよ。（*CH*, I, p.545）

メイによれば、彼女を性行為へと促した「欲望」«des appels» は、「愛」«l'amour» という「精神」に関わる作用の埒外にある。いわば「身体」に関わる作用と言えよう。「死に対峙する」と言うべき状況では、「精神」に代わって「身体」が主導権を握り、性行為へと導くということが明示されているのである[18]。また、性行為というものが、命の誕生いわゆる生に関わる行為であることを考慮すると、メイのみならずキヨや陳にも見られる一連の「身体」的な反応は、死を目前とした「身体」による再生への試み、いわば一種の抵抗を想起させるものとなると言えよう[19]。

2）キヨと陳のためらい

「身体」の抵抗という観点で言えば、キヨと陳の描写にはまた別の特徴も見出すことができる。先にキヨに関する描写から取り上げると、彼については、まず、「もし自死することを決心すれば、彼は自死することができた」（*CH*, VI, p.735）という表現を通して意志の強固さが示される。しかし、その一方で、「生が私たち自身に私たちの本当の姿を暴く、その人間本来の無頓着さ」を知っていることによる不安も表明されている（*CH*, VI, p.735）。ここで、「生」«la vie» とは既に述べた

18）これは、マルローよる『チャタレイ夫人の恋人』の書評と呼応している。André Malraux, «D. H. Lawrence et l'érotisme, à propos de *L'Amant de Lady Chatterley*», in *La Nouvelle revue française*, janvier 1932, p.139 : «Il s'agit de détruire notre mythe de l'amour, et de créer un nouveau mythe de la sexualité : de faire de l'érotisme une *valeur*.»

19）「死に対峙する」行為と性的イメージの関係は、『西欧の誘惑』や『王道』、『侮蔑の時代』にも見られるものである。前掲拙論参照。

ように「身体」を想起させるものである。また、「人間本来の」«sauvage» という単語から「精神」の働きの及ばない「身体」に根差した働きが想定される。以上を考慮すると、上記のキヨの描写では、意志という「精神」の働きの決定的な優位性が提示されながらも、「生」および「人間本来の」という単語を通して喚起される「身体」の働きの可能性への不安が明記されていることになる。つまり、キヨの「身体」は、暴力の対象として虐げられた存在であると同時に、自らの内在的な可能性によって、「精神」の従者と言うべきキヨを脅かす存在でもあるのだ。

次に挙げる陳の描写では、さらに直接的に「身体」の抵抗が描かれていることが分かるだろう。問題となるのは、陳が暗殺を終えて仲間のもとに戻った直後を描いた場面である。

> みんな馬鹿馬鹿しいほどの熱心さで陳を見ていた。しかし何も言わなかった。彼の方は、ヒマワリの種が一面に散らばった敷石に目をやった。彼はその男たちに報告することはできた。しかし、自分が考えていることを説明することは決してできなかっただろう。刀に感じられた身体の抵抗が彼にしつこくつきまとっていた。それほど、それは自分の腕を刺した時のものよりも大きかった。「あれほど堅いものだとは一度も思ったことがなかったのに…。」（*CH*, I, p.517）

確かに、陳が暗殺を実行する際、対象者は終始眠っているため、陳と対象者との直接的な争いは起こらず、暗殺は遂行される（*CH*, I, pp.511-514）。しかしながら、上記の引用で示されるように、刺殺する際に生じた「身体の抵抗」«La résistance du corps» が、その後も陳を執拗に悩ませることになるのである。ちなみに、対象者を刺す直前、陳は、「身体の抵抗」についての懸念を示した後、自分の左腕を刺すことによってその確認を行っている（*CH*, I, p.512）。このような陳の懸念や自分の「身体」を代用とする試行は、後に描かれる暗殺の対象者の「身体」の記憶とともに、「身体の抵抗」を強調するものとして見なすことができるだろう。一見、何の抵抗もなく死を受容したかのように見える「身体」も、感覚的な記憶を通して抵抗を示しているのである。さらに、「身体」の「堅さ」«dur» について述べた陳の言及に注目する必要があるだろう。勿論、この言葉は、「身体」の抵抗の大きさを具体的かつ明確に示す表現だと言える。しかし、同時に、本稿の最初に引用した『侮蔑の時代』の主人公のカスナーに関する描写を明白に想起させるものとなっている。改めて、カスナーが強制収容所内で自殺に失敗した場面を取り上げてみよう。彼の描写には、「肉体は彼が思っている以上に弾力性があり、しかも堅かった[20]」«la chair était à la fois plus élastique et plus dure qu'il ne le croyait» という記述が見られるのである。想定を超越した「身体」の堅さという観点から見れば、陳の言葉とカスナーの描写はまさに一致していると言えるだろう。『人間の条件』では暗殺が遂行され、『侮蔑の時代』では自殺が未遂に終わるというように、

20）*Op.cit.*, p.803.

両作品には、人間の死をめぐる差異が見られるが、通底して「身体」の抵抗が描かれていることが分かるのである。

おわりに

中国を物語の舞台とする『人間の条件』では、日本という、同じく「東洋」における武士道を背景に、「東洋」のイメージを付与された二人の主要登場人物が自死を遂行する。「精神」と「身体」という二元論的な観点で見れば、「精神」的な側面の優位性と「身体」に対する軽視が明白に提示されている。このような「精神」と「身体」の関係は、『西欧の誘惑』から『王道』、そして『侮蔑の時代』へと発展し受け継がれていく「身体」の再評価という主題から逸脱したものだと言える。しかし、『人間の条件』において、死に至らしめられる「身体」は、単に死を受容するだけではない。そこには、新たな生の登場を彷彿させる官能のイメージが付与される。そして、「身体」に内在する力が予感させられると同時に、例えば、刺した短刀を通して感じられる肉体の抵抗のような、具体的な感覚としての「身体の抵抗」が描かれるのである。このような「身体」の特徴に関して、『西欧の誘惑』や『王道』、『侮蔑の時代』という作品群に与する「身体」の復権という主題を指摘することができるだろう。つまり、『人間の条件』において描かれる「身体」には、抑圧された側面と価値が回復した側面、対立する二つの側面が同時に見られることになる。これはどのようなことを意味していると考えることができるだろうか。

マルロー作品における「精神」と「身体」の関係を改めて確認すると、まず、『西欧の誘惑』において、「西洋」では「精神」が過大評価され「身体」が過小評価されていることが指摘される。しかし同時に、「西洋」の外部となる「東洋」が新たな可能性を拓く場として機能することを通して、「身体」の働きの高まりが示唆される。次に、『王道』では、まさに「東洋」を舞台に「身体」の復権が描かれ、後に、それは、舞台を「西洋」に移した『侮蔑の時代』にも登場することになる。つまり、「西洋」で公平とは言いがたい関係を結んだ「精神」と「身体」が、「東洋」において新たな関係を獲得した後、それを「西洋」でも展開していくことになるのである。このような流れを考慮すると、『人間の条件』における両者の関係の在り方も明らかになると言えるだろう。同作品では、「西洋」に関する問題として掲げられた「精神」と「身体」の極端に偏った関係を、日本の武士道、言い換えると「東洋」における一つの思想に投影することを通して、別の角度から考察し直していると見なすことができる。そして、そこには、前作となる『王道』で提示した「身体」の復権のイメージも脈々と生き続けているのである。このような「身体」の在り方には、イメージの不統一が見られることは否めない。しかし、その後、『侮蔑の時代』で、「身体」という観点から「死に対峙する」人間の在り方への一つの答えが提示されることを考慮すると、『人間の条件』における「身体」のイメージの混在は、マルローの模索をまさに映し出すものだと言えよう。

（沖縄国際大学准教授）